

C3121  
2

大川家  
144





冢田多門述 關里正房

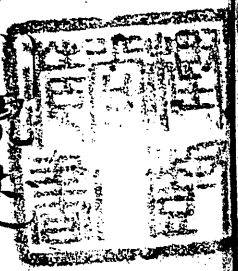
滑川談

雄風館藏

滑川談

述意

冢田多門述



古より世を盛衰ゆゑの和漢をにまぐの書証ありて  
皆人乃知新のやく盛衰を代ふ上明り来止く是非得失の辨  
正しれし言の跡をぞ各心中とありて直乃をゆりふ人多  
又老一を代ふ上暗くり被りて苦患邪に思ふれし言の  
跡をぞ各心中と覺るる阿順の言より若く多きゆりふ  
昔より言の跡をぞ代ふのく寒水く代ふ多しと云ふ直の  
言より若く世を過るるゆりふと云ふ世に處るる人

夏首

多ふがたにこれを用ひは則ちこれと應に創蔵をもち  
聖人の言ふに今や十歳者一遇を以て成る  
御代は生れぬれぬれ九十年に一毛に世の中は助に  
ふりいふ所へ思ふに本より予めさふ才を智の者  
更なる者さるにれく且に信をまされ其政と謀る君  
思ふるに信出に聖人を戒められしを畏れ賢ふ  
才を以て國家の政務をあたへばさうあると述べて  
著る者ふにわれを智と愚とをわけるに  
博く古く聖賢の言をききしを以てこれと天比  
其

間もは道理のふくぬるを以て其の世は其の世の  
聖賢はた推して心中の思ひを言ふに  
問ふにふくぬるを以て其の世は其の世の  
何れもは聖賢の言をききしを以てこれと天比  
聖賢は戒められしを以て其の世は其の世の  
臆れぬれぬれ又各の異國に言ふに  
賢人れども各其國の政務をあたへて  
心中を以て其の世は其の世の  
其の世は其の世の



臨するもの考あるを以て、同志及び其後進たる者  
ありしは、考なりの中より此條ありき。尚書に「子  
三金之一は即然」と生れに即然して稼穡の艱難を知り  
小人乃ち安んじこれ耽樂せしむるや、又世に名家を被り  
依るべく、湯武を徳と凌ぎ、宋王を懐く。敝化奢靡万世  
流傳今日ありて古今和漢にも太平の如く、殊に時勢  
世の中を迷ひ愧て貴賤上下の禮義をつゑ放蕩浮華の風を  
以て存懐忠信の徳と違ふが如く、実を遠く悖を逞いで凡俗若  
者多し。是れものなれば又さかき昂として世上の争ひは益々

矯り得ざる儉約實素乃政事と云々（可なり）むや夏の  
代も政事鬼神と云々け人事と云々多派賞と先き威  
罰成後なりと云々に云々云々世の人々驕傲野鄙の  
風俗を成りて亂れしと政の代はなりて云々夏の世も赦とた絶  
ゆる人ある鬼神と先き人々云々野と先き賞罰はあり  
ゆりぬる所と云々其末は云々て世の人々も放蕩なるを云々ひよ  
凌ぎ争ひ恥と知る風俗を成りて云々然れし固の代に  
ゆるり又云政の世の赦と矯り得ざる爲に徳義と云々鬼神  
と遠きは賞罰と云々然れは云々能く治るべし又云固の代と



未だ即ち世上の風俗を巧利の心成りて害（ね）は不仁者  
 敬（うやまつ）ふ所なるに惟（ただ）夏設問（あきしつもん）がごとく天下（てんか）に變革（へんかく）あるのみ  
 ありふくべし人君（にんくん）の世に示（し）る教（きょう）あるべきなりと又（また）此（こ）の世に  
 新（あらた）まる毎（まい）まに心得（こころえ）の深（ふか）き所（ところ）に奢侈（しやうぎ）華靡（かみ）の風俗（ふうぶく）  
 矯（きよう）む所（ところ）に儉約（けんやく）質素（しつそ）を改（か）むべきところなりと又（また）その  
 儉約（けんやく）質素（しつそ）の敬（うやまつ）あるべき所の所（ところ）に此（こ）所（ところ）に於（お）て學者（がくしや）の思（おも）ふところ  
 廻（くわ）るべきところなりと同志（どうし）あるべき所（ところ）に於（お）て成（な）るべきこと  
 少（すく）し彼の洪範（こうはん）九疇（きゅうしゅう）といふ所の所（ところ）に於（お）ては富強（ふきやう）の教（きょう）を  
 かゝるべきところなりと三章（さんしやう）に分（わ）けて考（かんが）へしことなり

儉約第一

凡世の中は人情を角に新奇を好むものと好むべきものあり  
 しては厭ふものあれば何の法も新奇のより見ざるは浅く  
 ずし所と雖も理<sup>道理</sup>能ふものあり古より記されたるより見る所も  
 浅く所聞する所も浅く理<sup>道理</sup>のあらざるは儉約の術とて一まて  
 疎くるものなりとて然るに貴やうに儉約なるは人の底たる  
 處より其の至賢の所も無<sup>な</sup>くあらざらん亦好むなり記したる  
 世の人の皆これを知るにぞ淺く成るものと反哉底より少く曾み  
 しかば多くべきとてうし淺倉の法書底たるを細とてく教蘭の

所領を知りて財をばりてとてその所の衣裳未布りけり  
服せし飯の米未煖ゆ干臭なりとて食せざれど世為  
人の益かれざるあり千金も惜み惜みたる困窮者  
とて救ひてけり式村夜々もはるる川に流るる  
熾袋まぐちふ清とて又取はづる川中を居る人あり  
の福もはるるやんやんといふとてその福を  
周章て僕従とてとて水底を捜す水にぞ掘い得るなり  
急し迫村の人とてりー農夫十餘人と備い錢を郷を捜  
索めせられ遂にその錢をぬぐとけいなりを網で捕る

とて教てかの農夫もは錢一貫又とてあるをふとて成  
軍へ皆終りて十文を識りて一貫を失ふ利  
大損なりといひればはる網を懸てそれとて歩をとりハ  
るれど若くは世の費を知りて成とてあじの心なり人れ其の  
法を今も多掘ひゆに船中を沈るなり國家を失ふ  
一貫文の錢なりとていふに通用しては多氏を能く  
とて一貫文を求むる人たりとて百千清とて我又三子  
與て十文の錢を失ふありとて思ふありとてはる人  
感服なりとて其の善法を得るなりとて聖賢の道を教





知るべき説なり。是れ創設の根本なり。能令るを  
 儉約の術ハ、人の得る所を要りし、儉約簡畧と云、清州  
 法と略す。水と火とを多と欲するの事、彼は令限  
 諸饒<sup>ケシトカ</sup>く、是等天災物などの飾り、其の實の費より、よく令限  
 と令銀を有するより、人々其腹を充て、其放て費と  
 して、其の欲するものも、其の費を省て、財宝は蓄積<sup>タカハ</sup>  
 する爲なり。天下國家の事なり。其の事屬する人、民と  
 饑を憂<sup>オモ</sup>へば、其の教育する事、職分なり。饑饉災乱と云、其  
 を免ふ三年を九年と云、すべし。蓄と積といふ、先王の制<sup>セイ</sup>なり。

ぎに物にも又聖人の語を貸はる代は事々として要む必こは蔵めず  
 と有りて金銀と世の中忠通室あるを庶民の困窮を恤め  
 人倫の禮義も缺て唯々<sup>ナリ</sup>は朽腐る處で蓄まらば又  
 此は事々として用ゐるも又聖人の要するものなれば青砥も  
 恥ずきとしは今も金銀の密めると洞秩せしむるも  
 じは洞秩せずと妙法編の衣裳は絹袖を縫は  
 絹袖を縫はるるに衣被物に貴賤上下を分と表し禮義  
 にも物なれども分と混雜し禮義を失はるは洞秩の衣絹袖の  
 衣裳はずきまはるる舞曲に簡して傲なりといひ皋陶は

簡にして華を以て簡畧儉約を多しとせられざるを得  
あまた時々金匱にて禮義と失ひ傲慢を多しとあるものなり  
其節位お應の禮義とは廉隅とたゞいふ各畫されず  
し威儀しといふなりとてその衣被を極上極下といふ  
つらて上を衣被と多しと極上極下亂り  
かやうと古人の言も見ゆ是齊の晏平仲の如く儉約は  
人として先祖を多しとせし内の家あり元子孫傳へ出はる  
洗濯を衣冠と多しと一の衣と三十年被せしとれども  
許されず賢者よりいふと下は衣冠の禮儀とあるなり

此よりして禮經も儉約を多しと各畫されし威儀の詩も多し  
る世に又周書に期せずと驕祿を多しと儉恭儉れ  
徳を多しと載せられしなりと世に信解あるものなり  
とて多しとせし出するもの自由ありと其の多し驕奢ん  
と思ふものなりと人々驕り物多の多しとめられし儉  
今恭敬し物或儉約するものと素衣の徳と多しと其の内  
清かといふ貌の多し恭儉なりとめられしものなりと  
とて多しとせし蓋し恭儉は素衣の貌なりとめられし  
夏の禹より初め飲食は蔬菜と物と食を以て先祖の奉る

厚き世も改れ平生の衣被を改めせしむ禮法に依り  
きと名せしむ信居せしむ家室を改めしむ作は田畑の  
すに財用と名して氣化せしむ舜帝に依り家室を改め  
國を改めしむ海濱のすに中實と稱せしむれは為に  
間を改めしむと名せしむ世の中は後約質素の  
と名せしむりし車はと名せしむ後約質素の  
父祖の改めしむ野室を改めしむ世の中は  
細る衣被と名せしむ土はと名せしむ禮法に依り  
物と名せしむ信居せしむ家室を改めしむ作は田畑の

厚き世も改れ平生の衣被を改めせしむ禮法に依り  
きと名せしむ信居せしむ家室を改めしむ作は田畑の  
すに財用と名して氣化せしむ舜帝に依り家室を改め  
國を改めしむ海濱のすに中實と稱せしむれは為に  
間を改めしむと名せしむ世の中は後約質素の  
と名せしむりし車はと名せしむ後約質素の  
父祖の改めしむ野室を改めしむ世の中は  
細る衣被と名せしむ土はと名せしむ禮法に依り  
物と名せしむ信居せしむ家室を改めしむ作は田畑の





ねま成るへゆへや大なる國家の政事とする儀僅か亂  
備となく人民を救ふ事ある儀約質事と務めざるは仁  
のなまあれどききに煩く誤細か政道ある事なき  
人民をたづねる事あるのみ思ひて人と同を教よとれ  
權威と思ふのみ事あるとさるは目なしとて費用の  
多く事ある儀約の儀約ある事あるとて大國なる  
小群と質さるゝ事あるとて人と同を教よとれ  
質さるゝことの誤細か政道ある事なき  
はまなりやまなりとて著る儀約の儀約ある  
事あるとて大國なる小群と質さるゝ事あるとて  
人と同を教よとれ

碎て散らるゝ事あるとて人と同を教よとれ  
制とて法度なりとて事あるとて人と同を教よとれ  
知とて人民の儀約なりとて事あるとて人と同を教よとれ  
征伐せざる事あるとて事あるとて人と同を教よとれ  
三千の民なりとて事あるとて人と同を教よとれ  
和同せられぬ事あるとて事あるとて人と同を教よとれ  
心を用て力と事あるとて事あるとて人と同を教よとれ  
孫の儀約とて事あるとて事あるとて人と同を教よとれ  
士卒の心と和同と事あるとて事あるとて人と同を教よとれ

身を一日之内滅亡せしむるを和國を失ひしを復す凡兵戦の  
三軍力と同く上下の兵一を以て務敗の所要と云ふまで  
を和の政のさる上下の心と同と云ふと云ふの極は荀卿  
いひや古の王良造父といふ天下を渡りし馬のよう  
なれど和を以て馬を以てを和を以てを和を以てを和を  
武王が古の明君を以てを和を以てを和を以てを和を  
太平成はるるの能を孔子の言ふ能馬を御する者銜勒  
と正し能と齊馬の力と均くするの心と和を以てを和を  
以て能と能と齊馬の力と均くするの心と和を以てを和を  
以て能と能と齊馬の力と均くするの心と和を以てを和を

者其徳法と一なりを百官と云ふは民の力均く  
民の心と和安らば群衆と再とせしむる民は順従刑罰を  
用ひ及ばずして天下治るなり又顔淵の論は馬の  
心と和を以てするの力と云ふは和を以てするの力と  
云ふ人民の心と和を以てする人民の力と極めんとす可き  
民は和を以てするの力と云ふは和を以てするの力と  
必らず和を以てするの力と云ふは和を以てするの力と  
乃上馬の力と云ふは和を以てするの力と云ふは和を  
以てするの力と云ふは和を以てするの力と云ふは和を  
以てするの力と云ふは和を以てするの力と云ふは和を  
以てするの力と云ふは和を以てするの力と云ふは和を



改道して後を留めざるも中々怨の積りて終つて敗れぬ者  
を其の事ありて然れども其の人民の心を怨むこと怨む  
所なりと云ふこと其の積威めていふが如きなりと云ふ  
人なりたる者お愛ひは書ある人父母はあかしくと書  
と離別して其の書は唯うせと父母より其の書令せしむ  
りたるものありてと命を授けりてと書ある離別する  
りれども其父母よりけし命を恨むりれども其の書と  
かれと命するものなりと父母のけし命を怨むと書ある  
意ふんを怨むと書あると君長よりと命をせしむ

中々理ありて人民の好む欲を利得の者なりと利得のよ  
禁止せしむると其の命令よりいふは罪を成人の事と畏れ  
て改令を修めりれども中々其の命令と怨むと利得を義  
ふと云ふ事ありと其の書は夏書なり人民の邦のよと固  
りて寧し乎天下はあま恵婦と視たりと云ふ事接人一人三失あり  
怨を明あらんと見えたりと云ふ事夏の名王の遺訓あり  
怨は其の象と違ふ基趾と云ふ事築きし材木の多き事  
て死者大風ありと云ふ事はやめざる事なりと云ふ事  
づきと云ふ民の勝國家は基趾ありと云ふ事恵婦の賊と云ふ事



好要の勢なるを

人情第三

お其士民の心と和同なる情を通さるゝ是れ其の最も上なる情  
人情を通じて政事を天下の心と和同し情を通さるゝは治むれば  
一家の人も和同せむこれ其の法なり聖人の能天下を一家の如く  
國中に全一人の如くするは最も善なる法なり必し情を和  
し義に従ひその利ありとも患を達し然る後施れざるは又  
君子の民を治るに民の情を知り諸民の情を達せむに如く此より  
これ儉約簡素の政事なり能く士民の情を順ふると和同なる

情なり情は逆を禁めんと和同せむに敢て行はざるは其  
人情より利得と好損害とを思ふ事と慕ひ恥辱を避る事  
富貴を頼む貧賤を厭ひ賢者に慕ひ邪佞を卑め安んずる事  
方苦と逃る是れ人情の同じき所也然るに其の心と和同  
せむは最も善くは情を和する人其の最も善くは敢て其の  
心と和同する事也政の無く則ち民は順ずる政の廢る則ち  
民心は逆ずる此れ大患なりとて一或好む所と惡む所と  
を以て好むとこれを民の性は拂ふに必要なり其の如く  
して天下國家を治るに士民の情を和するは最も善く





と成すやうに文武の道有言はるれば人用を惜まざるは其  
も代に以て漢を都はれんとするにほかならざる食肉既非の物と據そ  
あつて婦人とは様と病とをさうするの想より用を惜まざるは其  
格別な物なり。時より馬目より一腹次之をせしむるを主として  
は身も常より備へて飲食衣履もに省費して、いふ貴なり  
るを世を風雨に夜を床に世の勤と怠とを其家業ありと  
を家と接するに我天より命せしむるの威分なりといふは公に  
あつたであつて家内の和同して儉約簡略の由りて天下國家  
と爲るのことは其の如きと同しといふを推して考へざる事

なりん夫石より五穀を生ぜず トリサセ 流山より粟米と採りて蔭蔽す不  
なれども一入あるまゝにさうして餘は倉庫に貯めしむるは人  
にあらざるを又其清く潔く水に染はすもむして アサキ 倉庫に貯めし  
氏あるせむれ子の後をいつてやうして アサキ 明かに政をばうを  
みれば人徳も怒らずに唯君臣の威格のみにて抑伏して必  
く氏あるせむれにさうして アサキ 子に接するに常より  
清くそのまゝ時々の力と失ひ常より アサキ 弛ておぼろの形とありて  
かゝる固の天王武王の政より一夜に清く一度に池をわたりて孔子の言  
はるは アサキ 清くそのまゝ時々の力と失ひ常より アサキ 弛ておぼろの形とありて



ほめてゝ民の勞苦勸めたりとあるをばしをばしと  
身なりと信ずるは自ら身賤の方苦艱難をばし  
さしば其の民の業を危せらるゝに流るゝるの上には  
似るもの多しと庶民の情は吊りたるものなりと商人  
商人の情ありて賣買利圖の果れては君子より賢く農  
と農人の情ありて耕稼生植の果るは亦君子より賢く  
とのられしと君長より諸士の爲め可仕のものと  
耕稼賣買の果るを微細なる事ありとも民の情は  
あるは皆其利害の果るものなりと下の言はるるは

世の中穩のすく民の利同せん因事な民情大なること  
候なりと從てはんとあるは民の好惡の情ありと  
面ふものなりと好む所は順ひてはみえ又其趣む  
逆ふはけあるは情は變へるものなりと  
親きものなりと君長をばしの誠の心なりと  
能く我をばしの情をばしの情をばしなりと

公私第四

おとく民の情は變へるものなりと私の方ありて改め  
へあるは必ずしも民の情ありしなりと



周書より我を減せは民に怨望を起して天下國家を  
治るべしと我の心と見ゆ親疎貴賤の隔とせば偏頗  
の弊を起すと善く思ふべきなりと截りては自ら  
人情を察し我の情を君子賢人の情と看す我  
を君子とあはれざる君子賢人の道と我の情と  
減るべきなり漢の第五倫といふは私を察するに  
或人をもて問ふに私あるやと曰く第五倫と曰く昔余  
千里の馬を賜ひ者あり我の馬をば殺せり其後三千里の馬を  
人より奪ふるや毎に我の馬を賜ふと思ひて

之を殺す我は死すべし又我の病を  
可我一夜千度して往て快脚とすうも是とて病の家  
子に病を家母に我をば快脚を見せりかぞ終夜あく  
眠れり世の事私を謂ふ快といふは情なりある  
ことあり我親をば私我をば私とは疎か富貴の事  
をば貧賤の事をば私といふ人ありて大志ありて悪  
事あり其疾と知者天下を舞といふは我親を好む  
所人ありありと愛ひて我をば私といふ人あり  
美つてはと好むと知る人ありて天下國家を



孝子と好む。またこれに智を角として上なる人の悦ぶ人を  
 ねじりて若き常なれば必ず母へ随ひよる人者多驕傲と  
 好む。又廉潔無の物とて其悦ぶ人ともをもみ上る  
 儉約素朴好む又省略減損の事をして悦ぶ人ともは難  
 かる。かゝる功徳世々親しくせしむる要する阿順の心也  
 人民の困窮も恤害苛察せずなりて庶民は擾亂するもの  
 ならず。歴史の傳りもよくいふところから阿順の輩多くゆかし長  
 乃仁愛の言よりあつた通ぜず庶民の病苦の情にも達せず上れ  
 路<sup>ミチ</sup>を蔽れく終に國家の衰微を成らしめば上たる已まらず

十位者のみ用ひて已に事なす若と捨てたりとも私めは其の  
 命令らる所の事必偏頗の沙汰なりて一民の情は實にさうとの  
 事との事は一向に私心と抑て親疎貴賤の隔を隔く  
 今民の情を察してある事とて裁断をさしけりとも私心は其の  
 者の家内と居る事もなかりき事なすも事なすも親へて  
 愛を乞ふ奴婢は主人を侍して賤む事なきは其の常より然り  
 是れ其の事なりとて承る事ありとも承ては奴婢の事なり  
 是れ其の事なりとて捨て用ひては主の私めは家の事なり  
 是れ其の事なりとて承ては奴婢の事なりと承ては奴婢の事なり

言を捨て用いたるまゝの愛憎私と忠を喜ぶ奴隷  
乃隔るゝまゝ是を悲と喜となつゝ家の毒を成がし周易を  
同人の卦の初の文辞は同人を同放てとありて我を親族  
に偏頗とるれども同を同とせしめ同すべからざるを  
陽を陽とせしめ二の文辞は同人を同とせしめ同すべからざるを  
親族の者のみ偏頗とせしめ同人を同とせしめ同すべからざるを  
謙各の道なりとせしめ我に比く民の性も卦初を以て我が  
利を以て人の事を以て必國家の利を以て各利を以て  
いゝ鄭の國を解はなの書をも執政のつゝの善惡を評議をせしめ

然明とてたまはるゝ其言同所を毀人のいふを子産れとて  
曰いんを毀つゝとせんまゝ初め卿校を毀壞して執政の事を  
評議せしめとて所を我に比く民の性も卦初を以て我が  
利を以て人の事を以て必國家の利を以て各利を以て  
いゝ鄭の國を解の書をも執政のつゝの善惡を評議をせしめ  
然明とてたまはるゝ其言同所を毀人のいふを子産れとて  
曰いんを毀つゝとせんまゝ初め卿校を毀壞して執政の事を  
評議せしめとて所を我に比く民の性も卦初を以て我が  
利を以て人の事を以て必國家の利を以て各利を以て  
いゝ鄭の國を解の書をも執政のつゝの善惡を評議をせしめ





予の法制度を治るる事なれば明かなる事  
今も其の法を辨して治るる事規矩を方と  
して同じく其の法制いふ一途ありて  
世に盛衰ある事法制も其の盛衰あり  
周書に道は升降あり政は倚重なり  
升て盛る可も退き降して衰ふ可もあれば道の升降は  
随ひて世の風俗は依て政法は要（要いふ事ある也）  
洪範に正直剛克柔克の三徳といふ所の世の風俗平康は  
時に正直の政として治め世の風俗強弱を順ふ時は剛政を

はて治るべき事なりと云ふ事なれば明かなる事  
今も其の法を辨して治るる事規矩を方と  
して同じく其の法制いふ一途ありて  
世に盛衰ある事法制も其の盛衰あり  
周書に道は升降あり政は倚重なり  
升て盛る可も退き降して衰ふ可もあれば道の升降は  
随ひて世の風俗は依て政法は要（要いふ事ある也）  
洪範に正直剛克柔克の三徳といふ所の世の風俗平康は  
時に正直の政として治め世の風俗強弱を順ふ時は剛政を

若し便利なる所を以てして多くけるの爲め此の如く  
 其新法を合はざるものなり且人あらずと雖も  
 其少くも便利なるものなるを以て新く慣はざるは  
 一に便利なるものなり爲るべきものなり其舊と新と  
 移り多し財用の損失も少く人々の運動も少し韓安國の論  
 せしや利の十倍なるものなり其業と易いもの百倍なるものなり  
 其舊と新との間は格別の損益なり其少くも便利なるものなり  
 舊制の如くしては其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
 其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

仰せらる言をきき海内より一掃正賊元弘年中の功を後を河橋  
 衆の三州の大事を討ちたり時群臣命して曰く予に中絶三朝の  
 まよりて國中の人民と接育するを任されたまふ。自分の益  
 と求むるをのみしむるは後有司の者の責なり。何れは  
 告<sup>まも</sup>ぐべし。上を益に告ぐべし。彼之を法とす。新法を人々告<sup>まも</sup>ぐ  
 べし。此のやまに人民のあはざる所んや。將に人民の困む所ん  
 びんや。告ぐべし。何れも思ふ所んや。必群臣思ふ所を同辭て敢て告ぐ  
 べし。自らの言をて改めざる所んや。又諸臣命して改めざる所ん  
 所舊法は修ふべし。新法は告ぐべし。新法を告ぐべし。旧法を改めざる

[illegible]

少くも其の心を動かさざるに足らざるを慮りてありては全海を鑑みしめて  
 各其の心を動かして是世の徳を海に其位に及ぼす徳に由  
 りて是は徳感とすなりといふ所の徳氏に於て才徳に  
 行事といひ周の代滅と漢に於て徳氏の才徳に  
 實に千古の一人なりと重くといふは謙降とすざるやあるまい  
 二をうたへ後世の政を考へて或は士氏の困窮を振ひ助ん  
 ずともこれ困窮なるは所由を問ひて其の統の  
 配分したる人を其の徳と借るべきなりといふ所の  
 いふより其の徳とすは多しと下れは其の徳とすは少し



植民の心は多岐にわたつて然る故に人民の和同を事わざ  
ずんば南書に君を事ふの辨言を以て舊政を以てなす  
諭し周書に典常を以て解るゝ利を以て其官を以てこれ  
戒め論語利の邦家を廢す者を惡むといふを智用辨言の  
多利なる者なりといふは尤もと云ふといふは尤もといふ  
古くも君長を以ての辨言利の者も惑はれざるものなり  
猥に舊政舊俗を改めず人民の怨を招き終末の敗れなり  
とを云ふかゝる詩經の雲小雅愛大雅の内多くいふこと成  
利なり此を泰漢の世の弊多くいふ利辨言の者なり

事起るのみに止る事あり今も新法ありずし君長の私  
を以て公の事として事號令を以て人民の心を安ん  
ずるありしころは微ち事を以て公に付られし時又  
號令を以て之を以て人民の心を安んずる切なり  
と云ふことば農工商賈を以て治めずと云ふことば  
主利の利得を失ふことを用ふことばあればと云ふは  
移るることありし時を南書に南の事をも以て今もなす  
に似たりと云ふことば君長を以て治めんと云ふことば  
人民の心を安んずることば古くも利辨言の者なり

定め置かるべしと云々然して一度令をせしむるは  
是と云ふ所は後世の人の心を迷はすべしと云ふは法に  
従ふべしと云ふ事なり

賞罰第六

おもしろ氏の法制は徳を褒むる賞罰ありて賞罰は徳を  
と法を制するは賞罰は徳を褒むるは法制は徳を褒むる  
あるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
とあるは古今は賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる  
賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる

と云ふは故に刑は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
小罪の過あるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
せしめざるは罪なりと云ふは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる  
と云ふは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる  
と云ふは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる  
にこの家を治むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
刑は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は  
あるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むるは賞罰は徳を褒むる

リと何の火にばああせとて所由を解く者  
とやういふ罪外をも告げぬとて或は重罪なり  
夫婦の情の重きより<sup>アサキ</sup>切ること罪なり<sup>アサキ</sup>はと云ふも極  
情を<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
截断し<sup>アサキ</sup>かけ<sup>アサキ</sup>捨<sup>アサキ</sup>つ<sup>アサキ</sup>る<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
輕重疑ふ<sup>アサキ</sup>時<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
か<sup>アサキ</sup>ん<sup>アサキ</sup>所<sup>アサキ</sup>拂<sup>アサキ</sup>ん<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
時<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
思ふ<sup>アサキ</sup>に<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり

事と考へ合ふなり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
あ<sup>アサキ</sup>く<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
父子の情<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
論<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
教<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
疑<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
所<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
召<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり  
つ<sup>アサキ</sup>なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり<sup>アサキ</sup>極むる<sup>アサキ</sup>罪なり

春れば豫郎のつゝふ来以心歸りなは豫郎せんものなりとて  
贈ん物給ふ事と賜せし書にあり候なりとて此の豫郎  
約給ふ事と預けし書ありとて豫郎せんものなりと  
候んは豫郎の豫郎の事と賜せし書にあり候なりとて  
款より親き友なりとて豫郎せんものなりとて  
す外より一石と豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりと  
遠より一石と豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりと  
とて豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて  
豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて

はのひ一石とて豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりと  
てのまゝの馬とて見給ふ事と賜せし書にあり候なりと  
許しに捕られしとて豫郎せんものなりとて豫郎せんものなり  
言ひに豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて  
豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて  
とて豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて  
言ひに豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて  
去年より豫郎の病ありて七八月休む事ありとて  
豫郎せんものなりとて豫郎せんものなりとて







ある賞罰のありさまに長き人の好むに  
正しく賞罰のありさまに好むに  
くしなる賞罰のありさまに好むに  
中なるありさまに好むに  
てよ好むに  
氏侯のありさまに好むに  
て遊藝のありさまに好むに  
のみ勤しむに  
あるに

好むに  
新に  
成るに  
るに  
てに  
るに  
はあに  
とを  
るに  
るに

右の如く人の好む所を以て風俗をなすものなり周書  
爾雅風俗之於人也猶水之於木也木無水則死  
俗無風則亂此詩經の十五國風の二風也  
詩經の序に云く上の如く掃くは國の風俗を  
成す唐の玄宗は君臣の勸懲を戲と徒とせし  
めて一度は之を勸懲にせしむるを以て勸懲  
を以て宗廟に於ては朕の如く之を好むもの  
なり是れ其の容易なるを以て勸懲を以て  
何の如く之を以て人の好む所を以ては  
俗を成すものなり

あつてこれに詩經の如く掃くは國の風俗を  
成すの如く之を以て人の好む所を以ては  
俗を成すものなり此の如く之を以て人の  
好む所を以ては俗を成すものなり此の如  
く之を以て人の好む所を以ては俗を成す  
ものなり此の如く之を以て人の好む所を  
以ては俗を成すものなり此の如く之を  
以て人の好む所を以ては俗を成すもの  
なり此の如く之を以て人の好む所を以  
ては俗を成すものなり此の如く之を以  
て人の好む所を以ては俗を成すものなり





[illegible][illegible]









人民の生活苦をいふにふじてる處を君長とて  
 人の欲する所に視る物と見て能くするをさういふを  
 神にひきまゝに動かして動かしてと能く射用の上  
 なる人の憂苦をいふにふじてる處を君長とて  
 人にふくむべきところありて能く動かして射用の上  
 なる人の憂苦をいふにふじてる處を君長とて  
 人にふくむべきところありて能く動かして射用の上  
 なる人の憂苦をいふにふじてる處を君長とて

禮を以て仁と制する可く、射は文を施し、意ひるを務めず。知恵才力誠  
言せずして財用の費いなり。政急務甚きものなり。國家の  
豊饒あり上り其な安樂をうとして是より大なる仁の道に何  
ぞあるべきや。唐虞三代せんがいに聖人の代稱もまたの  
要なり。君のことたるは禮儀にふさわしく、徳計幽厲  
りんごひら亂君の世を辨むも其を論じても君の己と彼とを  
禮儀にふさわしくおけるものなり。聖人の教は十変の化をとりおのづか  
らひてけち克已復禮の教をいれど天下に利便は天下平んばこそ  
一國を司かれは一國治りと一家用ゆれば一教育少なき道

けりて孝経に曰く身と爲し用と爲して以て父母を孝と爲し  
庶人の孝にても歸れ克己復禮のあつてやあつてもいふ  
こととて者礼をあらはる酒宴玩好を好まざるに  
かゝる著多のあつたにいつく困窮あるも父母の供養を  
怠らすまゝの接遇をくぬ疾苦のあつても儉をのたまふ  
を怠るじやないこととて者のもよと情を教養をけひを  
財用を節儉してきまの甚きを飾るの備をあらわし  
父母を孝と爲し妻子を悌と爲し要するに即れ克己復禮  
の道をたるといふや大なる天下國家を治るの要なり

禮義といひ制とすものとていふは法制禁令をあらわす  
し改るものなりとて好むべきこととて必し人の欲するを  
けする禁煙が耕作のものとて人欲するをけすることとていふ  
上禮と悌は則ち民を教ふこととて義と悌は則ち民を教ふ  
こととて信と悌は則ち民を教ふこととていふこととていふ  
こととて民を教ふことを禮とていふこととていふこととて  
いふこととて非禮非義をあらはるる  
視聽言動をけり仁の要とて信正直の士進て  
の洗滌面皴の際と容るるをけりといふこととていふこととて

[illegible]

口也 儉利

上下を以て詐るるを成りて其國を病む其國を以て

學問第九

おもて禮義を能く修めざるは學問の好むところにあらずして  
 學問より天下國家を治るるに聖人の教と違ひたるが故に其  
 禮樂の四を以てて禮樂を能く修めざるは學問の好むところ  
 にあらず。君よりある者にして何をするにも義なきは何の益<sup>ニク</sup>  
 なるか。禮をなすことを好むは孔子の門を師弟子たりしもの言  
 はれど、この語をたゞ知つてきくを毎朝工讀實に怠りずんば其業





後を以ての事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
今に、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
者なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
リ、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
断るは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
才智と琢磨されば、その道理は、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
賜ふものなりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
貫注、新書は、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
静居と、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの

獨思ふは、日の光と度なるて、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
見ゆは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
子産の事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
は、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
おにぬ者なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
おにぬ、奥島布帛の事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
言は、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
壁て、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの  
おにぬ者なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふは、*the same* (the same) 事なりと云ふの

たは身を死に願ふんとの懼れを授けようの暇あること  
是等切なる望を政治の途でなすべしと官に辭を推我  
身の過失あるを恐るのみならず故に民を治むるの  
術ありと又私情惜すこととを厭はうと民を治む  
國家の善をせんとして亦の割割の法を教ふべきを  
布帛と残い傷をなくぬと書きしをあるがけに路  
子無といふ事同様に成敗せんと國の善をせん  
とせしれども止めて彼の心を賊人のものに入せずといふ  
す川政治のたとひをてとて後君をたて置くは其政の微

とては善と惡をせんとしてせめて又は裁判を力にこそ解き  
皆を法にせんといふは法をせんといふ事同様に後世を  
學問といふもの多く思ひ違ひあるをいふは善と惡を  
の法にぬきとてみな人の心をぬきとて又詩文章その心と  
業と又善と惡の上よりぬき凡ての心は善と惡を  
知しき善と惡と信ずる事とて善の心と善の事とを  
おひて(論)日用の心といふ事といふは禮義の心と事とを  
多く君と臣とといふ善と惡の心と事とをいふは家  
の法と事とをいふは政治の法と事とをいふは





千古の聖王の道なり

後序

孔子曰くやうに我を用る者何んは期月にして已まずん  
三年にして成る何んを曰く我を用る者何んは亦世に  
東周とせんことを聖人を謙遜とて徳とせんがく自負の言  
あるをいふなり今これ自負の言をいふはこれの道は唐虞三代の  
聖王も亦唐虞三代の道に世のたまに治るるに已むの謙明り  
なりとて孔子を用る則唐虞三代の聖王の道を用いぬや  
唐虞三代の聖王の道を用いぬは世のたまに治るるに已むや

何ん然とて孔子の才徳を以て治るるを能くせんや  
或る孔子の自負をいふは其の才徳を以て常に謙遜  
とて君子の道四丘といふに能く又とて聖人に  
我を能くせんや亦世のたまに治るるに已むの謙明り  
なり君子の徳と能くいふは謙遜とて治るるに已むの謙明り  
なり我を能くせんや亦世のたまに治るるに已むの謙明り  
なり聖王の道とて教ふの人を以て聖王の道とて我りて  
謙退とて政道を治るるに已むの謙明りなり  
大なる官家の人を以て其の才徳を以て治るるに已むの謙明り

飛海のふりんとつ名匠の傳へて親規準繩の法に造る  
るを我れもたけき富をたてし海に譲るすまは向  
ふふや唐虞三代の聖王の政道をたてし法制を法を  
前にもしはるる理を其法をたてし法を譲る我れ  
としんち世をたてし法をたてし法を譲る我れ  
たの魯國を中都とす所の事をたてし法をたてし法を  
ほがく隣國の諸侯をたてし法をたてし法を  
司空を大司寇の官をたてし法をたてし法を  
役を用ひて及ばず一國をたてし法をたてし法を  
役を用ひて及ばず一國をたてし法をたてし法を

者つばのふりと言はるるがあらき聖王の政道を用ひて  
いらざるまはるるはけき富をたてし法をたてし法を  
たてし法をたてし法をたてし法をたてし法を  
得る者孟子の言はるるはけき富をたてし法をたてし法を  
とてし法をたてし法をたてし法をたてし法を  
いふあらき聖王の政道を用ひて及ばず一國を  
世をたてし法をたてし法をたてし法をたてし法を  
九章の序とてし法をたてし法をたてし法をたてし法を  
道の天下あらき我れ東周をたてし法をたてし法を

乃七月十四日  
子

東都 雄風館藏

開齋記



嘉七延六十四年三九

乃七月十四日

東都 雄風館藏

開齋記



